スマトラ沖地震、インド洋大津波から一年

～夢と希望を インドネシア・アチェ州の子どもたちに支援を～

2004年12月26日朝、インドネシアのスマトラ島北部沖でマグニチュード(M)9.0の大地震が起き、その直後に発生した大津波はアンダマン海からインド洋、アフリカ東部沿岸の国や地域を破壊した。

ボランティア団体の「TSUNAMI　留学生帰国支援・北海道」(以下、「TSUNAMI」と略)の支援で地震発生から４カ月後の今年４月に、被災した母国インドネシアに一時帰国した北海道大学の留学生ルビス・アフマド・ヒダヤットさんは、最大の被災地のひとつ、ナングロ・アチェ州(以下、アチェ州と略)の惨状を目の当たりにしてきた。

札幌に戻ったルビスさんは被災した子どもたちに「励ましのサッカーボールを贈ろう」と「TSUNAMI」のメンバーたちと支援活動を続けた。ルビスさんに話を聞いた。

ルビス・アフマド・ヒダヤットさん
(Lubis Ahmad Hidayat)
(インドネシア、スマトラ島メダン出身)
北海道大学工学部
原子力安全工学博士課程3年

被災地のアチェについて語るルビスさん

津波が運んできた船が屋根の上に。手前は道路だった。道路沿いの家はすべて流された(写真提供・ルビスさん)

一時帰国の支援を受けて被災地へ

アチェの被災地に入ったのは4月27日で地震からすでに4カ月が経っていました。今さら行ってももうすることが無いのでは、と思いながら行きました。私はアチェ州の隣の北スマトラ州メダン市出身なのでアチェは子どもの頃からよく知っていました。メダンにいた頃の親友もアチェ人で、北大の留学生仲間にも4人のアチェ人がいました。

私の専攻は原子力安全工学です。10万人規模の人が一度に亡くなるなどということは核爆発以外には考えられないことで驚きました。それだけに母国の被災地のために何かしなければという気持ちが強かったです。アチェとは利害関係のない立場にいる自分ならば現地で活動できると思ったのですが、留学生の一時帰国ということになると費用の面ですぐには行けませんでした。せめてと思って雪の降る中で大学の留学生仲間と札幌市内の大型スーパー前などで、3回募金活動をしました。そんな時に新聞などで募金活動を知った「TSUNAMI」のメンバーから連絡があって、そのグループの資金援助で一時帰国ができました。

「TSUNAMI」は募金活動を、私たち留学生は「インドネシア留学生協会」を通じて支援帰国を希望する留学生を捜しました。「TSUNAMI」は今回、北海道から私とアチェ出身の北海道大学留学生2名、スリランカ出身の室蘭工業大学留学生1名の計3名を被災した母国に送り出してくれました。

バンダ・アチェ(英国BBC電子版より)
左=津波前の町と海岸線　右=津波直後の様子

想像以上の被災地の状況

紛争が続いていて危険な地域と思う方もあるでしょうが、アチェは決して危ない所ではありません。もともと交易などで栄えた地域で、アチェ人は周囲と調和して暮らすことのできる友好的な人たちです。初めてアチェに行ったのは1994年のことです。今回もそうですが私の母も、危ないから、と止めました。それでも昔からアチェに対して良いイメージを持っている私は何か手伝いたいと思ったのです。

私が行った4月、暑い季節になったのに被災者は炎天下でテント暮らしをしていました。避難キャンプによっては食事の提供も滞りがちということで、復旧の目途がついているとは思えない状況でした。2、3kmも流されて壊れた家の屋根に乗っかったままの船とか、4kmも内陸まで流された幅20m全長50mの大きな発電船などがそのままになっていました。そんな中で人々は親を失った子供を引き取るなど、助け合いながら暮らしていました。

やっと笑顔が戻ったが…(保護されているイスラム学校で)(ルビスさん撮影)

「津波危険区域。地震が起きたら高い所に行きなさい」
津波後に立てられた警戒を呼びかける看板
(英国BBC電子版より)